

少人数クラスのハイブリッド授業運営における教職員の協働と準備

Collaboration and preparation of faculty and staff in small class hybrid class management

水木 凜空 MIZUKI Riku

デジタルハリウッド大学 大学院グループチーフ
Digital Hollywood University, Chief of Graduate School Office

2020年度よりデジタルハリウッド大学大学院にて遠隔授業とハイブリッド授業を実施し、デジタルハリウッド大学大学院事務局スタッフはすべての授業に密着して1年間対応したため、それぞれの授業実施方法の違い、運営上のコツ、教員と学生の欲求を把握した。2021年度では、「各教員に教育効果に配慮して授業の実施方法を選んでもらう」ことを方針として、遠隔授業と対面授業とハイブリッド授業が始まった。本報告では、デジタルハリウッド大学大学院事務局が2020年度より約1年半の少人数クラス授業を運営した経験をまとめ、教職員の協働と準備について、デジタルハリウッド大学大学院ならではの視点で分析する。

キーワード：COVID-19、ハイブリッド授業、ハイフレックス型授業、少人数授業運営、教職員協働

1. はじめに

2020年4月7日(火)に、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策として、日本(東京都)において1回目の緊急事態宣言が発令された。その後、各大学において授業の遠隔移行に伴い、Zoomミーティング、Google Meetなどのオンラインミーティングツールが教職員、学生の間に普及し始めた。しかしながら、完全に遠隔で実施する授業に不応している教員と学生がいる一方、一部の演習科目では遠隔授業で行うと教育効果が下がってしまう問題も存在している。1回目の緊急事態宣言が終了してから、デジタルハリウッド大学大学院(以下「本学」という)では一部ハイブリッド授業を実施したが、人と物の準備がマニュアル化されていない時期であったため、試行錯誤しながら摸索しなければならなかった。

本報では、本学が2020年2月から2021年7月までに実施したハイブリッド授業の経験をまとめ、履修者が100名以内である少人数クラスのハイブリッド授業運営における教職員の協働と準備の詳細を社会に向けて提示する。

2. ハイブリッド授業とは

2020年度前期、教育業界はまだ各種授業の実施方法について呼び方の統一がされていなかったため、「オンライン授業」「遠隔授業」「リアル授業」「対面授業」「面接授業」「面接授業と遠隔授業の併用実施」「ハイブリッド授業」「ハイフレックス授業」などの言葉が文部科学省やそれぞれの大学で使われていた。

2020年度後期に向けて、文部科学省から授業の実施方法をシラバスに明記するよう指示があったため、各大学の教職員のノウハウを確認し合ったことにより、授業の実施方法について共通用語が以前より統一できた。

現在、「遠隔授業」と「対面授業」の他、どちらも併用する実施方法「ハイブリッド授業」がさらに細分化され、一般的にはハイフレックス型授業、ブレンド型授業と分散型授業の3種類に分類されている^[1]。

・ハイフレックス型授業

遠隔授業と対面授業が同時に実施され、全履修者に対して授業内容が同一である授業方法を指している。

・ブレンド型授業

1回目は遠隔授業、2回目は対面授業、3回目はハイフレックス授業…といったように、各回の実施方法が変わるが、全履修者に対して授業内容が同一である授業方法を指している。

・分散型授業

遠隔授業と対面授業が同時に実施され、授業内容は履修者によってすべてまたは一部が違う授業方法を指している。

各種授業実施方法の関係を図1の通り示す。

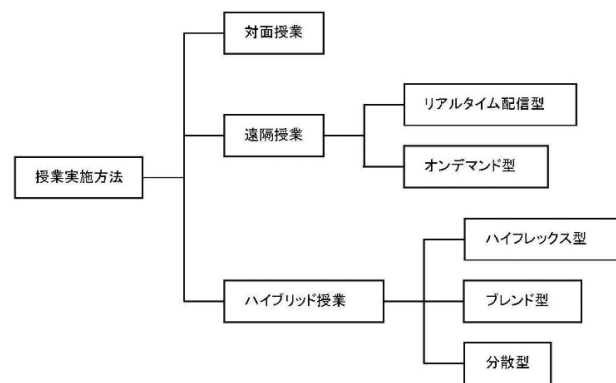


図1：各種授業実施方法の関係

3. 本学におけるハイブリッド授業の実施

3.1 ハイブリッド授業の礎となる遠隔授業の実施

2020年4月から6月にわたり、2020年度1Qの専門科目を遠隔で実施し、5月からは研究実践科目(各指導教員によるゼミナール式の科目)も遠隔で実施した。本学では主にZoomミーティングというオンラインミーティングツールを使用しているが、個別の研究実践科目ではGoogle MeetとWebexも使用していた。

最初の難関は、4月上旬にシンガポールであった、10代の女子学生に対し地理の授業をオンライン(Zoomミーティング)配信していた際に、わいせつな画像やコメントが表示された事件により、Zoomミーティングによる遠隔授業の開講に不安がある教員がいたことである。

教員の不安を解消するために、本学事務局スタッフが日本国内外で報道されていたニュース^[2]を確認し、シンガポール教育省の該当事件についての対策を理解したうえで、定例会議でZoomミーティングの各種設定に関する勉強会を実施した。勉強会では、シンガポールと同じような事件が起こらないよう授業用のZoomアカウントの設定を統一した。事件の本質的な問題はリンクを知っている人なら誰でも参加でき、参加者なら誰でも画面共有とホワイトボードが利用できるとなるため、具体的には待機室、参加用URL（パスコードが埋め込まれているかどうか）、ゲスト参加者の権限設定を変えた。

さらに、複数の検証実験を行ったりすることで、事務局スタッフがミュート、ビデオ、チャット、画面共有、レコーディング、ブレイクアウトルーム、リアクションといった基本機能を理解し、教員にZoomミーティングの利便性を紹介できるようになった。個別で不安のある教員については、授業担当が事前にテスト授業を実施し、授業当日も密着してサポートを行った。

実際に、パスコードが埋め込まれていない参加用URLを発行し、待機室を設け、画面共有の権限をホストと共同ホストのみになるよう初期設定を行い、字幕およびホワイトボードの使用を制限したうえで、事務局スタッフが1年間密着してすべて遠隔で実施した専門科目に対応し、出席確認を行ったため、大きなセキュリティ問題は起こらなかった。しかし、一部の学生が個別のSNSグループにてそれぞれの授業参加用Zoomミーティング情報を共有し合っていたのは問題であった。

また、PCやZoomミーティングの操作に自信のない教員には、事前のテスト授業を実施する以外に、授業実施日当日にも来校のうえ、授業担当によるサポートを受けてもらいながら開講したこともある。研究実践科目について、教員と履修者が運営主体となるため、事務局より有料版Zoomアカウントを発行した場合は、独自に作成したZoomミーティングの説明資料と映像をアカウントの管理を行う教員に配布していた。学生には別途、簡易版の使用マニュアルを作成し共有していた。

逆に、一部PCやアプリの操作が得意な教員なら、事務局スタッフがまだ把握していない遠隔授業で活用できる機能（投票、他アプリとの連動等）に関するノウハウも持っていることにより、教職員の技術コミュニケーションを増やすと気づきも多くなるため、将来的に遠隔授業を長期的に継続し、教育の質を上げるには、定期的な教職員交流会実施が求められると考える。

3.2 ハイブリッド授業／イベントの実施

本学は2020年度の授業実施が始まる前に、2020年2月29日に、初めての配信イベント「デジタルハリウッド大学大学院 2019年度成果発表会 DEFRAGMENT -DHGS the DAY-」を実施した。例年半年間くらいの時間をかけて企画してきた、本学の学生募集上一番大事なイベントであったが、東京都においての新型コロナウイルス感染症の拡大によって、開催日の約1週間前に、実施方法を完全対面から、登壇者および教員観客のみ来場の生中継へ変更せざるを得なかった。その際は業者に配信を依頼したが、事務局スタッフも準備と当日の運営で配信のノウハウを培った。イベントの結果、例年より参加者が増えていた。参加者の空間問題が解決できたことが大きな理由であり、イベントだけでなく、授業の出席率も同じ理由で高くなるのではないかと考えていた。

出席率の変化については2020年4月以降の遠隔授業で検証でき、遠隔の場合出席者数が多くなり、前期末に実施したアンケート調査でも移動が少なくなるため楽になったと回答している学生がいた。遠隔授業の実施により、教職員がZoomミーティングに触れる機会が増え、特に事務局スタッフが普段のリモートワークからZoomミーティングを使用することで、Zoomミーティングを用いた授業運営の方法を自主的に考えられるようになったため、授業の実施に関しても提案ができるようになった。

2020年6月から7月にわたって、本学では専門科目「基礎造形」を実施した。「基礎造形」という科目はデッサンを通して基礎的な観察力と表現力を鍛える科目である。遠隔のみでデッサンの指導がうまくできるか教職員ともに心配があったため、2020年度初めてのハイブリッド授業として実施に至ったが、特にこのような演習を行う授業では、遠隔より対面のほうが指導しやすいため、事務局が意図的に現場の授業風景を撮影するカメラを設け、遠隔の参加者に対面の雰囲気を感じてもらった。

また、受講環境（モチーフ、イーゼルと画板の有無）によって対面参加者と遠隔参加者が同じ作業を行えないため、ハイフレックス型ではなく、分散型で授業を実施していた。例えば第5回と第6回の授業では、対面の参加者が事務局から提供した立方体、球体、円錐のモチーフによってデッサンを行ったが、遠隔参加者の自宅にはそのような環境がないため、教員の指示に沿って周りがあるなるべく柄がない白い立方体、球体を描いてもらった。第7回と第8回の授業では、対面参加者が人物のクロッキーを練習し（図2）、遠隔参加者が自分の手でクロッキーの練習をしていた。



図2：2020年度「基礎造形」第7回と第8回の対面授業風景

参加者数について、最初に遠隔か対面かどちらに参加するかを履修者に選んでもらったため、29名のうち対面の参加者はほぼ毎回8名程度で同じメンバーであった。2021年度の同科目も同じ内容で2021年7月に実施を始めたが、第1回と第2回が対面授業で履修者28名が全員参加し、第3回と第4回が緊急事態宣言により分散型に戻っても、17名の対面参加が継続され、科目のFeedback Sheetでは遠隔で受講する場合分らないことが多く感じたので今後はやはり対面で参加したいという意見があった。比較があるから、どちらがいかにも判断しやすくなったと考えられる。

「基礎造形」の実施を通して、事務局スタッフがZOOMミーティングにある個別の参加者ビデオを強調できるスポットライト（参加者全員に対して強調する）とピン（自分だけに対して強調する）といった機能、そして参加者表示のスピーカービュー（アクティブまたは強調されているビデオのみ表示する）とギャラリービュー（すべての参加者を表示する）といった方法について理解を深めることができ、その後の対談式授業で1対1のディスカッションや質疑応答ではオンライン参加者に分かりやすく見せることができた。

「基礎造形」の運営を経験し、2020年度の8月17日（月）から8月21日（金）までに、集中講義の専門科目「特別講義A」を初めてハイフレックス型で実施した。担当教員が対面のコミュニケーションと雑談により受講者にインパクトを与えることが得意なため、講義とディスカッションの形式でありながらも、遠隔ではなくハイフレックス型が希望されていた。しかし履修者40名のうち、初日の対面受講希望者は6名しかいなかった。これは4月から8月までの間4か月間で遠隔の講義授業を受けた学生が、講義授業なら対面で受ける必要がないと考えていることによると、その後のアンケート調査で分かった。

ハイフレックス型授業について、対面参加者の声をどのようにすればきれいに遠隔参加者に届けられるのかが一番大事な課題である。具体的には教室の外付けスピーカーを通して教員のPCから音声を出し、教員もずっとマイクをミュートにしない場合、同じ教室にいる対面参加者が近距離で自分のPCでマイクのミュートを解除し話すとハウリングが発生する。逆に対面参加者がマイクのミュートを解除しないと遠隔参加者が該当対面参加者の声をほとんど聞くことができない。考えられる解決策が次の3つとなる。

1. 教員とすべての対面参加者がマイク付きのイヤホンを使用する。
2. 教員も履修者も相手が発言するたび迅速に自分のPCでマイクをミュートしスピーカーの出力音量を0%に変更する。
3. ある範囲内にいる全員の声が拾えるスピーカーフォンセットを使用する。

すべての対面参加者がマイク付きのイヤホンを使用すると、遠隔受講とあまり変わらないため、望ましくないが、教員と学生に迅速なPC対応を求めることも現実的ではないため、前述した科目「特別講義A」の授業運営ではスピーカーフォンセットを使用していた。

スピーカーフォンの本体(図3で中央にある楕円形の機材)を部屋の中央に設置のうえ、専用ケーブルで遠隔授業に参加する教員または事務局スタッフのPCと繋げ、該当PCで遠隔授業用のZoomミーティングに入室した後に、マイクの設定をスピーカーフォンに変えれば、收音範囲内(半径2m)は問題なく声を拾うことができる。しかし、收音範囲から離れると、遠隔受講者へ声が届かなくなるため、收音範囲を広げる対策として、教室の大きさに沿って收音用のスピーカーフォンマイク(図3で左右にある丸い機材)を増やす必要がある。また、実証実験を行ったところ、音質は1人につき1つのマイク(マイク付きイヤホン、卓上マイク等)のほうが高いと見られている。

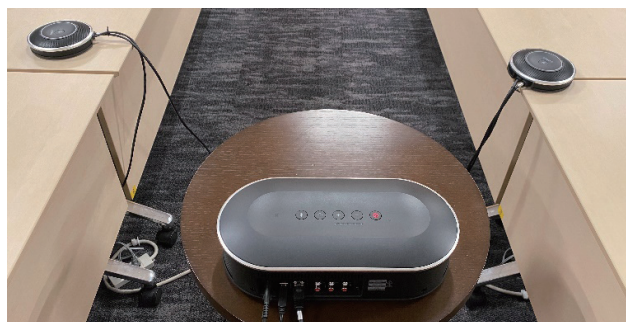


図3：本学が現在使用しているスピーカーフォンセット

しかし、すべてのシーンでスピーカーフォンが適用できるわけではない。例えば対面参加者と遠隔参加者が同じグループでディスカッションを行う、特に1対1でディスカッションを行う場合、スピーカーフォン1つのみでの対応が難しくなり、対面参加者は全員イヤホンを使用し、発言する人のみ発言するタイミングでマイクのミュートを解除し、他のグループと3m以上の距離を保持したほうが互いに影響が少ない。そのため、履修者がハイブリッド授業を対面で受講する場合は、イヤホンの持参を推奨する。

ハイブリッド授業の対応や準備について工夫した点として、開講日は事務局スタッフによって毎回事前に教室の消毒を行っていた。また、教員と学生が来校する際には、受付にて検温および来校登録をしたうえで入館を許可していた。教室内には手指消毒用のアルコールを設置し、エアコンの他、空気清浄機も運転させていた。教員がPCの操作に不慣れのため、教員顔写真撮影用のPCを事務局にて準備し、授業担当が同教室で別のPCを通じてZoomミーティングによる入室管理、画面共有等の操作を行った。

なお、教員が機材やZoomミーティングの設定に詳しくない場合、授業中にトラブルが発生し、大事な講義時間が無駄になる可能性も

あるため、スムーズな運営には事務局の事前テストチェックと密着したサポートが求められると考える。

2020年度後期以降、ハイフレックス型の実施回数が増えたため、さらなる経験により、教員が対面参加者ばかりに集中してしまわないよう、教卓の横にもう一台のPCを設置し、別のアカウントにて授業のZoomミーティングに参加したことで、教員が自分の画面がどのようにオンラインの受講者に見られているのかが確認でき、そのPCでチャットを確認しやすくなることが分かった。

実際、ソフトウェアのスキル演習を行っている授業では2020年度からすでに一部の教員が自ら2台のPCによる参加のメリットに気づいていたが、講義中心の科目を担当する教員ならあまり気づかない一方、遠隔の場合では2台以上のPCを準備することにも無理があった。

さらに、配信やVRのスキルを持っている教員は自主的にOBSやアバターによる遠隔授業実施も始めた。

2020年末に2021年度のシラバスを作成していた際には、本学学長杉山知之により、下記の2021年度授業実施方針が決定された。

「新型コロナウイルス感染症対策の特例措置^[3]として、2020年度前期より遠隔授業での講義実施が可能となりました。つきまして、2021年度は教育効果を鑑み、対面授業、遠隔授業、ハイブリッド授業(対面授業と遠隔授業を同時に実施する)3種類の実施方法から運用するものを決め、授業計画を行ってください。専門科目については、コマ毎に実施方法を細かく指定することが可能です。研究実践科目については、どちらの方法も実施するという選択も可能です」(※本引用文章の「ハイブリッド授業」は本報告に説明している「ハイフレックス授業」と同じことである。また、新型コロナウイルス感染症対策の特例措置^[3]は文部科学省が令和2年7月27日に事務連絡として公開した『本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について』を指す。)^[4]

本方針により、2021年度すべての科目がブレンド型で実施できるようになった。専門科目全51科目のうち、10科目の教員がブレンド型を希望していた。また、緊急事態宣言に伴って、一部のコマ実施方法を変更せざるを得ない科目があったため、受動的にブレンド型になった科目も存在している。例えば2021年度1Q開講の専門科目「先端科学原論」は本来なら全コマハイフレックス型(図4)で実施する予定だったが、2021年4月25日に緊急事態宣言が発令されたため、第2回より第7回までは遠隔授業に変更していた。

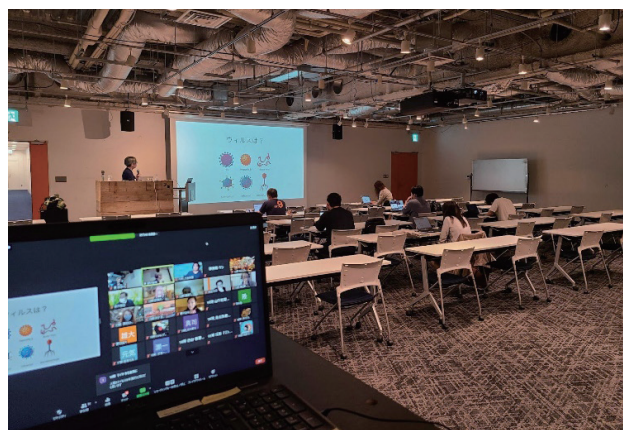


図4：2021年度科目「先端科学原論」第1回授業風景

一方、最初は意図的にブレンド型実施を予定していたが、緊急事態宣言の発令に伴い、全コマ遠隔授業に変わった科目もあるため、ブレンド型の実施方法についてはどのくらい効果があるかはまだ検証できていない。

4. アンケート調査による検証

4.1 2020年度前期学生に向けた満足度調査

4.1.1 2020年度前期の学生満足度

2020年度前期、在学生171名にアンケートを配布し、73件の回答が回収できた。遠隔授業、教員、事務局への満足度をそれぞれ図5の通り示す。

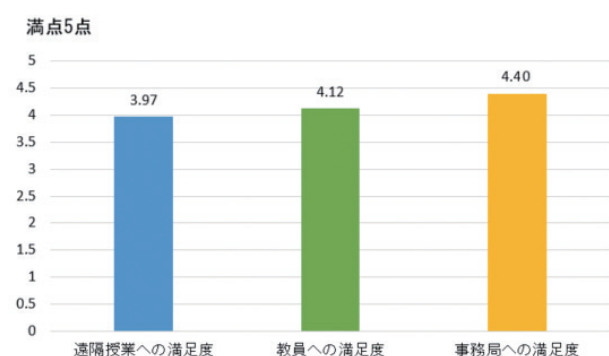


図5：2020年度前期満足度（回答者：2020年度前期在学生）

4.1.2 2020年度前期の調査結果によって把握できた課題

テキスト記述の設問で、次の課題が確認できた。

- ・講義なら遠隔でいいと思っている学生がいる
- ・遠隔でのフォローアップが随時にできていなかった
- ・コミュニケーションが薄く一方的な講義があった
- ・教員や他履修者とコミュニケーションが取りにくい
- ・遠隔のみなら留学の意味がないと思っている留学生がいる
- ・誰とも会わずに修了してしまうのが不安である
- ・対面コミュニケーションによる気づきと発見を得られなかった

この回答を受け、遠隔授業へのニーズがあること、遠隔授業のみの大学運営は良くないこと、ハイブリッド授業が必要であること、遠隔授業の実施を大幅に停止しない限りコミュニケーション問題解決が必要であることが分かった。事務局の対策として、前期の満足度調査結果を本学教員に報告のうえ、2020年度後期には教員と在卒生が参加できるクォーター終了後懇親会を実施し、授業交流用のSlackチャンネルを作成し試し運営を行った。

4.1.3 2020年度前期終了後の対面受講意思

回答者73名のうち、15名（21%）がすべての科目を対面で受講したいと回答し、25名（34%）が講義科目は遠隔でいいが演習科目は対面で受講したいと回答し、33名（45%）が新型コロナウイルス感染症の拡大が終息しない限りすべての科目を遠隔で受講したいと回答した（図6）。

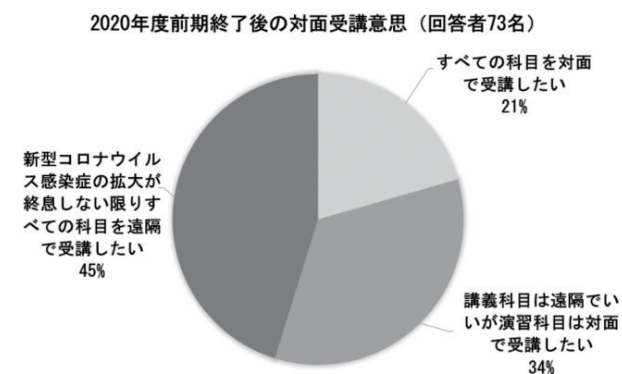


図6：2020年度前期終了後の対面受講意思

4.2 2020年度後期学生に向けた満足度調査

4.2.1 2020年度後期の学生満足度

2020年度後期、在学生163名にアンケートを配布し、59件の回答が回収できた。授業、教員、事務局への満足度をそれぞれ前期の数値と並べて図7の通り示す。

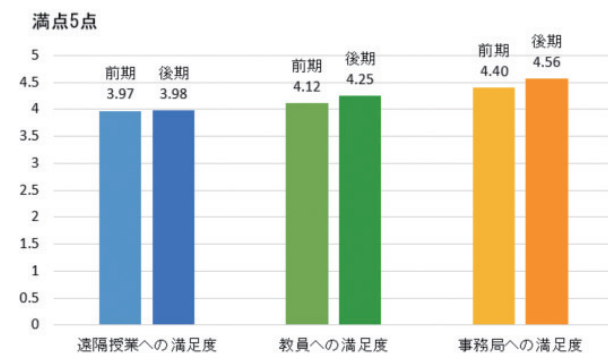


図7：2020年度後期満足度（回答者：2020年度後期在学生）

前期と後期の満足度調査結果から、授業への満足度は大きく変化がなかったが、教職員の改善により満足度が上がったことが分かった。

4.2.2 2020年度後期の調査結果によって把握できた課題と改善

テキスト記述の設問で、新たに次の課題が確認できた。

- ・大学院に通っている実感がない
- ・リモートで話すときに感情を伝えられない
- ・周りの熱意を感じにくい
- ・授業中に質問を受け付けられない先生の授業は眠くなる
- ・授業用のSlackが想像以上に活用できていない
- ・言葉の綾をイヤホン越しで聴いて頭が痛くなった
- ・ブレイクアウトルームで発言せずカメラオフの学生がいた
- ・ネット環境が不安定である
- ・ハイフレックス型授業の場合、現場の雑音が多かった

また、前期と比べると遠隔授業におけるコミュニケーションに関する不満が増えたことが分かった。コミュニケーションの課題を解決するために、2021年度現在はSlackの有料プランを購入し、全教員学生の参加を呼びかけた。特に2021年度の新入生は普段から当たり前のようにSlackを使用できている。結果、2021年度は2020年度4Qの試し運用時より投稿も反応も増えた。具体的には授業時間外に自発的に教員に質問したり履修者同士で経験と情報をシェアしたりしていることがある。

Slack以外に、事務局は学生が2020年度より自主的に運営している「oVice」というバーチャルオフィスサービスにより構築されたDHGSバーチャルキャンパス（図8）に出資し、支援することで、遠隔授業後に学生同士でコミュニケーションできる場が提供された。このバーチャルキャンパスでは、学生が毎週自発的に行っている輪番講義、院生定例会が実施されている。



図8：DHGSバーチャルキャンパス

2020年度前期と比べて改善された点は主に次の2点となる。

- ・Zoomミーティングによる遠隔授業運営がスムーズになった
- ・Slackにより質問がしやすくなった

2021年度現在さらに改善に向かっていることもある。例えば遠隔授業であっても来校し同じ科目の履修生が同じ教室で受講できるようにした。教室に教員はいないものの、大学のネット環境や機材を使用でき、オフラインの付き合いを求めている受講者間のコミュニケーション機会を与えた。ただし、受講のための来校は予約しなくて良いとしているため、最初は人数が読めず事務局スタッフがすべての教室を準備して大変であった。2021年度2Qに入ると、同日に全科目遠隔の場合来校者が固定の1名～2名であり、ハイフレックス型の講義授業がある場合1科目につき来校者数が履修者数の10%程度、ハイフレックス型の演習授業がある場合1科目につき来校者数が履修者数の60%以上であることが分かった。ハイフレックス型授業では、現場の雑音を減らすためにスピーカーフォンではなくPC内臓マイクまたはマイク付きイヤホンに戻り、貸し出し用のイヤホンを対面参加者に提供し始めた。

4.2.3 2020年度後期終了後の対面受講意思

回答者59名のうち、7名(12%)が対面で受講できる科目しか履修したくないと回答し、33名(56%)が基本遠隔授業を受講し対面授業でも内容が気になるなら履修すると回答し、19名(32%)が新型コロナウイルス感染症の拡大が終息しない限りすべての科目を遠隔で受講したいと回答した。(図9)

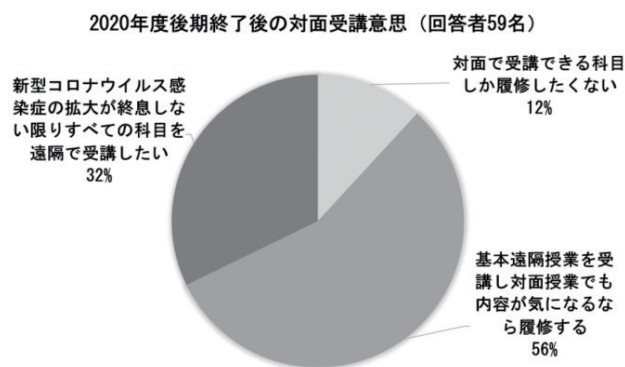


図9：2020年度後期終了後の対面受講意思

前期と比べて、対面でしか受講したくない人数と、新型コロナウイルス感染症の拡大が終息しない限り遠隔でしか受講したくない人数が減ったことが分かった。新型コロナウイルス感染症への認知と対策について学生が2020年度前期より詳しくなったことや、遠隔授業の体験でメリットとデメリットを理解し、対面のコミュニケーション欲求が増えたことが原因だと考える。

今後について、時間の推移によって学生の新型コロナウイルス感染症に対する感覚と恐怖心が変わりつつあり、さらにワクチンの接種進捗によって学生が対面授業への抵抗が減っていくことが予想できる。一方、完全遠隔や完全対面よりも、ハイブリッドのような自分で参加方法を選べる授業実施が求められると予測する。

5. 教職員の協働と準備のまとめ

5.1 職員の準備

5.1.1 ハイブリッド授業の遠隔運営に関する対応

3.1に述べた内容により、次のようなZoomミーティングツールの機能を把握したほうが良いと考える。

- (ア) 待機室
- (イ) アカウント認証
- (ウ) ホストとゲストの権限
- (エ) ミュートとビデオのオンオフ
- (オ) チャット
- (カ) ギャラリービューとスピーカービュー
- (キ) 画面共有
- (ク) 画面共有中のチャット確認
- (ケ) レコーディング
- (コ) ブレイクアウトルーム
- (サ) リアクション
- (シ) スポットライト
- (ス) ピン
- (セ) 投票(アンケート)
- (ソ) ホワイトボード
- (タ) アプリ追加

また、定期的なアプリのアップデートと新機能の把握も求められる。それぞれの教員のPCまたはツールの熟練度も違うため、特に新任教員がいる場合はこまめに確認することが推奨される。

遠隔参加者と教員、対面参加者とのコミュニケーション問題を解決するには、別途コミュニケーションツール(Slackのチャンネル、Facebookのグループ等)を準備したほうが望ましい。

5.1.2 対面運営に関する対応

事務局は次のような準備を行う。

- (ア) 履修者が全員対面で受講する場合ソーシャルディスタンスが取れる広さのある教室を予約
- (イ) 教室の消毒準備
- (ウ) 消毒道具の配置
- (エ) 現場風景撮影用のカメラ設置
- (オ) 教員確認用のサブPC準備
- (カ) スピーカーフォンの必要有無確認
- (キ) 貸し出し用のマイク付きイヤホン準備
- (ク) ハウリング発生時に速やかに解決できるよう、ハウリングの原因と解決策を把握

5.2 教員の準備

5.2.1 遠隔開講に関する対応

教員にとって教育が主要な任務であるため、教材開発が最も重要であるが、遠隔授業において次のようなオンラインミーティングツールの基本機能を把握することも求められる。

- (ア) ミュートとビデオのオンオフ
- (イ) チャット
- (ウ) ギャラリービューとスピーカービュー
- (エ) 画面共有
- (オ) 画面共有中のチャット確認
- (カ) ブレイクアウトルーム

- (キ) リアクション
- (ク) スポットライト
- (ケ) ホワイトボード

また、事務局スタッフは1年間の間何十科目もの運営をしていたため、毎週2コマ以内の講義しか実施していない教員よりは経験が多いと考えられる。このため、実現したい授業の実施方法があれば事前に事務局と相談し、必要に応じてテスト授業を行うことが推奨される。

遠隔参加者とのコミュニケーションには注意を払い、コミュニケーションツールやオンラインミーティングツールのチャット機能を活用することが求められる。

5.2.2 対面開講に関する対応

トラブルが発生した際に事務局と確認し対応時間が確保できるよう、開講時間より15分以上前の事前待機が望ましい。

6. おわりに

2020年より、教育業界における遠隔対応が新型コロナウイルス感染症の拡大によって必然的に迅速に発展してきた。現在、ワクチンの接種普及によって日常生活が少しずつ戻る見込みはあるが、教育業界への影響は不可逆的だと考えられる。たとえ新型コロナウイルス感染症の拡大が終息したとしても、遠隔授業を2年間体験し、遠隔授業の利便性を実感した学生と教員は今後も遠隔授業に対するニーズが消えないため、完全対面の時代より教育効果の高いハイブリッド授業の開発が求められる。それを実現するには、今までよりもこまめな教職員の協働および準備が必要である。大学の事務局スタッフは事務だけでなく、学校のデザインもしていけないといけない職種だと考えている。

参考文献

- [1] ハイブリッド型授業とは: <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/hybrid.php> (参照日: 2021年6月9日)
- [2] 海外で報道されたシンガポールのZoom事件: <https://baijiahao.baidu.com/s?id=1663691635631613360&wfr=spider&for=pc> (参照日: 2020年4月17日)
- [3] 新型コロナウイルス感染症対策の特例措置: https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
- [4] デジタルハリウッド大学大学院 2021年度シラバス作成ガイドライン: <http://u0u1.net/Bswx>